

ジャーナリスト殺しの説く「言論の自由」？！

By William Blum

Global Research, January 20, 2015

パリの事件の後、宗教的狂気に対する非難が極点に達した。最も進歩的な人々さえその多くが、ジハーディストの首を絞め、彼らの頭の中へ、知性、風刺、ユーモア、言論の自由などについて、何らかの考えを叩き込む空想をしているように見える。我々が対象とするのは、結局、サウディ・アラビアでなく、フランスで育てられ若者たちである。

このイスラム根本（過激）主義というものは、この現代において、いったいどこから来たものだろうか？ その大部分は——訓練され、武装され、財政援助され、叩き込まれて——アフガニスタン、イラク、リビア、そしてシリアかた来ている。1970年代から現代に至るさまざまな期間、これら4つの国は中東地域では、最も非宗教的で、現代的で、教育と福祉の進んだ国だった。そこで、これら非宗教的で、現代的な、教育・福祉国家に何が起ったのだろうか？

1980年代にアメリカは、進歩的で、女性の権利を十分に認めていたアフガン政府を引き倒した——それが、あろうことか、タリバンの誕生と彼らの政権奪取につながっていった。

2000年代に、アメリカはイラク政府を転覆させ、非宗教的なだけでなく文明をもつこの国家を破壊し、国家の体をなさぬものにしてしまった。

2011年には、アメリカとそのNATO軍事機械が、ムアンマー・カダフィの非宗教的リビア政府を転覆させ、無法国家をつくり出し、何百何千というジハーディスト（聖戦士）と膨大な量の武器を、中東全域にばら撒いた。

最近数年については、アメリカは、バシール・アル・アサドの非宗教的シリア政府を、転覆させることにかかりきっている。これはアメリカのイラク占領が、スンニ・シーア派という分裂を、幅広く生み出したのみならず、首切りや他の奇妙な風習をもつ「イスラム国」を生み出すことにつながっていった。

しかし、それにもかかわらず、世界は、資本主義、帝国主義、反共産主義、石油、イスラエル、それにジハーディストのためには、安全なものになった。神は偉大なり！

冷戦と、その上で起こった上記の介入とともに始まった、70年に及ぶアメリカの外交政策がある。それがなければ、ロシア/アメリカの著術家アンドレ・ヴルチェックが言ったように、「イラン、エジプト、インドネシアを含む、ほとんどすべてのムスリム国家は、今頃は、非常に穏健な、たいていは非宗教的な指導者グループの下で、社会主義国になっていたと思われる。」超圧政的な（最近亡くなったアブドラ国王の圧政で有名な）サウディ・アラビアでさえ、もしワシントンの介助がなかったなら、全く異なった国家になっていた可能性が高い。

1月11日、パリは、ジャーナリストがテロリストに暗殺された雑誌「シャルリ・エブド」を記念する、“国家的統一デモ”の場所になった。これは悲惨な事件ではあった。しかしそれは西側世界の偽善のお祭り騒ぎでもあった。フランスのテレビ局と集まった群衆が、いつまでも、ジャーナリストの自由、言論の自由を尊重する西側世界をほめたたえていた。それは「私はシャルリだ」「我々はシャルリだ」と宣伝するプラカードの海となり、巨大な鉛筆がこれ見よがしに振られていた——**あたかも、爆弾、侵略、政権転覆、拷問、それに無人機攻撃でなく、鉛筆（言論）が過去1世紀の中東での、西側の選択した武器であったかのよう**に。（強調は訳者）

http://therealnews.com/t2/index.php?option=com_content&task=view&id=832&Itemid=74&jumival=1280

アメリカ軍が、最近数十年の、中東や他の場所での戦争の過程で、数十人のジャーナリストを意図的に死なせたという事実には、ひと言も触れられなかった。イラクの多くの事件の1つとして、2人のロイター通信記者の冷血な殺しの場面を、ウィキリークスの2007年のビデオで見ることができる。また、3人の記者を殺し4人を負傷させた、2003年のアメリカによる、バグダッドの「アルジャジーラ」オフィスへの空対地ミサイル攻撃、それに2人の外国カメラマンを殺した同じ年の、アメリカによる、バグダッドの「ホテル・パレスチナ」砲撃も見ることができる。

更に、2001年10月8日、アメリカによるアフガニスタン爆撃の2日目に、タリバン政府の「ラジオ・シャーリ」の送信機が爆撃され、その直後に、アメリカは20カ所ほどの地方ラジオ局を爆撃した。米国防長官ドナルド・ラムズフェルドは、こう言ってこれらの施設を的にしたことを弁護した——「もちろん、それらを自由なメディア局と考えることはできない。それらはタリバンを代弁するものだから、テロリストを匿っているだろう。」

またユーゴスラビアでは、1999年、アメリカにとっても、他のどんな国にとっても全く脅威ではない国家への、あの悪名高い78日爆撃があり、その間に、国営の「ラジオ・テレビジョン・セルビア」(RTS)が攻撃されたが、その理由は、**アメリカやNATOの気に入らな**

い事柄——爆撃がどんな恐ろしい結果をもたらしているか——を放送していたからだった。この爆撃は、多くの放送局スタッフの命を奪い、生き残った者の一人は両足を失ったが、それは瓦礫の下から彼を救い出すのに切断しなければならなかったからだ。

ここに、パリの友人から私に送ってきた、シャルリ・エブド事件についてのある見解を紹介しよう。この友人はこの出版社とそのスタッフに、長く親密な付き合いがあった——

国際政治については、シャルリ・エブドは、ネオ・コン的だった。彼らは、ユーゴスラビア爆撃から現在に至るまでの、あらゆる NATO の介入を支持していた。彼らは反ムスリム、反ハマス（パレスチナ組織なら何でも）、反ロシア、反キューバ（漫画家の人は例外）、反ウゴ・チャベス、反イラン、反シリア、親プッシー・ライオット、親キエフ・・・もう続ける必要はないだろう。

奇妙なことに、この雑誌は“左翼”と考えられていた。今彼らを批判することは私には難しい。彼らは“悪者”ではなく、滑稽な漫画家集団にすぎず、特別なアジェンダももたず、政治的にも宗教的にも「コレクトネス」といったものには全く無頓着な連中、ただ面白がって“破壊（転倒）的な”雑誌を売ろうとしていた。（ただ例外は、前編集者の Philippe Val で、彼は正真正銘のネオ・コンだったと思う。）

馬鹿とより馬鹿

アルセニー・ヤツェニュークを覚えておいでだろうか？ 米務省官僚が 2014 年初頭に、自分たちに都合のいい者として採用し、新しい冷戦時代に、ウクライナ軍をロシアに敵対させるように、首相の地位へと引き上げてやったウクライナの男だ。

2015 年 1 月 7 日、ドイツのテレビのインタビューで、ヤツェニュークの口からなんと次のような言葉が飛び出した——「我々はみんな、ウクライナとドイツへのソ連の侵略をよく覚えている。我々はそれを許すつもりはない。そして誰も、第二次大戦の結果を書き換える権利をもたない。」

忘れてならないことだが、ウクライナ軍には、政府の高官であるネオ・ナチが数名含まれており、もっと多くのネオ・ナチが、この国の南東部のウクライナ親ロシア軍との戦いに参加している。昨年 6 月、ヤツェニュークは、これら親ロシアの人々を、ナチスの **Untermenschen** と同等の言葉で“**sub-humans**”（人間以下の者）と呼んだ。

だから今度、米政府の誰かが何か馬鹿げた発言をして、あなたが首を振るときには、アメリ

カの高官が必ずしも最も愚かなわけでないと考えて、いくらかでも慰めを得るとよい——もちろん、「帝国」の相棒として誰が最もふさわしいかを見抜く能力は別である。

今月パリで行われたような、ジハーディストによるテロ行為を非難するためのラリーは、昨年（2014）5月のウクライナのオデッサの犠牲者のためにも、同じように行われてしかるべきであろう。上で述べたのと同じタイプのネオ・ナチ連中が、カギ十字のような印を身に付けて街を行進し、ロシア人、共産主義者、それにユダヤ人の死を叫びながら、オデッサの労働組合の建物を焼き討ちし、何十人もの人々を殺し、数百人を病院へ送った。犠牲者の多くは、炎と煙から逃げようとするところを、殴られるか撃たれるかした。救急車が妨害されて怪我人のところに行けなかった…。たった一つのアメリカの主流メディアでも、この惨劇を少しでも真剣に報道しようとしたものがあつたかどうか、調べてごらんになるといい。あなたはワシントン DC のロシア放送 [RT.com](http://rt.com/) を訪ね、“Odessa fire”を検索して初めて、多くの物語と映像とビデオを見つけるだろう。またはウィキペディアで、2014年5月2日のオデッサ衝突の記事を読むことができる。

<http://rt.com/>

http://en.wikipedia.org/wiki/2_May_2014_Odessa_clashes

もしアメリカの民衆が、過去数年のウクライナでのネオ・ナチ的行動のすべての物語を、見、聞き、読むように強制されたとしたら、きっと彼らは——そう、アメリカ人や彼らの知的とは言えない連邦議員でさえ——なぜ自分たちの政府が、このような者たちとこれほど緊密に連携していたのだらうと思ひ始めるだらう。アメリカはこのような者たちの側に立って、ロシアと戦争を始めさえするかもしれない。

西洋はオデッサのためには、シャルリではない。パリでは、オデッサのためにラリーは起こらない。

イデオロギーと言われるものについて若干の私見

イスラエルを激しく批判する Norman Finkelstein が最近、[The Real News Network](http://therealnews.com/t2/index.php?option=com_content&task=view&id=832&Itemid=74&jumival=1280) のポール・ジェイによるインタビューを受けた。フィンケルスタインは、自分が若いころは毛沢東主義者だったが、1976年の中国の「4人組」の暴露と失脚によって、いかに打撃を受けたかを語った——

http://therealnews.com/t2/index.php?option=com_content&task=view&id=832&Itemid=74&jumival=1280

恐るべき膨大な腐敗があることがわかってきました。絶対に無私だと我々が考えてい

た人々が、全く自分のことしか考えていませんでした。それは疑問の余地のないもので、4人組の追放は膨大な民衆に後押しされていました。

多くの他の毛主義者も同様に、この事件によって心を引き裂かれた。

毛主義の全体が一夜にして覆されました。我々は彼らを、自分を後回しにして戦う、新しい社会主義者と考えていました。それが一夜にして完全に崩れ去りました。

(アメリカで) 共産党を倒したのはマッカーシーだと多くの人が考えています。それは間違いです。あなたが共産主義者だったあの頃、あなたはマッカーシズムに抵抗する内なる力を感じていました——それは大義だったから。共産党を倒したのはフルシチョフの演説でした。

これはソ連の第一書記だったニキタ・フルシチョフのことで、彼は1956年、ヨシフ・スターリンの犯罪と彼の独裁的なやり方を暴露した。

私は中国やロシアの革命に影響されてもよいほどの年齢になっており、興味も抱いていたが、私はそれにかぶれることはなかった。私は資本主義の礼賛者、忠実な反共主義者であり続けた。私の“4人組”や“フルシチョフ”に当たるものは、ベトナム戦争だった。1964年と65年の初めにかけて、私はニュースを注意深くたどり、アメリカの攻撃能力、爆撃出動数、死者数を、毎日の統計を追っていた。私は、歴史を作るほどの我々の偉大な戦力に、愛国的な誇りに満たされていた。アメリカが第二次大戦に突入したときに、ウィンストン・チャーチルが言ったような言葉が心にあった——「イギリスは生きる、ブリテンは生きる、英連邦は生きるであろう。」その後、ある日——ごく普通の日だったが——突然、なぜか説明できないが、ある考えが私に起った。聞き慣れないあのような名前の村々には、落ちてくる爆弾の下に人民がいるのだ——神のように恐ろしい機銃掃射から絶望的に逃げ惑う人民がいるのだ。

このパターンが私に定着した。それ以前は、ニュースは私にとって、自己正義的な満足として働き、どう言い逃れしても絶対に許されない考えをもつ、アカどもに教えてやっているのだと考えていた。それが次の瞬間、突然、その考えの恐ろしさに対する反発の波に襲われたのだった。究極的に、この反発は愛国的な誇りを抑えつけ、私は以前の考えに戻ることは決してなかった。それは繰り返し、何十年もの間一貫して、アメリカの外交政策の絶望的な正体を私に見せつけることになった。

生きよ、キューバ！ アメリカのキューバに対する行為の悪魔のリスト

1993年5月31日、不当な死、人的傷害、および経済的損害に対し、1,810億ドルをアメリカ政府に要求する訴訟が、あるハバナの裁判所に提出された。それは引き続いて国連へ提訴されたが、そのとき以来、それがどうなったかは謎に包まれている。

この訴訟の内容は、1959年のキューバ革命以来の40年間に覆うものであり、被害者たちの個人的証言から得られたかなりの詳しさによって、キューバに対するアメリカの侵略行為を記述したもので、しばしば名前、日付、それに特定の状況を伴って、殺された、あるいは重傷を負わされたことが判明している個人を特定している。総計3,478の人々が殺され、別に2,099名が重傷を負っている。(この数字には、ワシントンの経済的抑圧と封鎖による多くの間接的犠牲者は含まれていない。これは、創りだされたさまざまな苦境の中で、とりわけ薬品と食料の入手を困難にした。)

この訴状は法的な観点から見て、非常に細密に書かれていた。それは不当な個人の死に対して、その生き残った者のためであり、重傷を受けて生き残った者が、生きていくためだった。失敗したアメリカの攻撃は無関係とみなされた。したがって、キューバの大統領フィーデル・カストロや他の高官などに対する、何百という暗殺未遂についての証言は記載されず、誰も死なず負傷もしなかった爆弾事件でさえ除外された。作物や家畜、またはキューバ経済全体への損害も除外された。だから、この島国へ導入された豚インフルエンザやタバコ病などについても、証言はない。

しかし、ワシントンがキューバに仕掛けた化学戦や生物戦で、人的犠牲者が出たものについては、細かく記述されている。その最も重要なのは、1981年、出血デング熱を蔓延させられたことで、この時には約34万人が感染し、11万6,000人が入院した。これは、過去に誰もこの病気にかかった者がいない国で起こったものだった。結果として、101人の子供を含む158人が死んだ。入院した116,000人のうち、死んだ者がたった158人だったということは、キューバが健康管理面ですぐれていたことを物語る。

この訴状は、1959年10月に始まった、キューバに対する空軍と海軍の攻撃キャンペーンを記述している。そのとき米大統領だったドワイト・アイゼンハワーは、砂糖工場の空爆、砂糖キビ畑の焼き討ち、ハバナへの機銃掃射、さらに旅客列車攻撃をさえ含む計画を、承認した。

訴状の別のセクションでは、武装テロリスト団 **los banditos** (山賊) を説明しており、この集団は1960年から65年までの5年間、この島を荒らした。これらの集団は弱小農民を脅し、“革命”の積極的な支持者と(しばしば間違っ)考えられた人々を、拷問にかけ、男、

女、子供すべてを殺した。数人の若い、ボランティアで識字教育運動をやっていた人々も、この集団の犠牲者の中に入っている。

それからもちろん、1961年4月の、悪名高い「ピッグズ湾」侵略がある。この出来事は全体で72時間しか続かなかったが、176人のキューバ人が殺され、300人が負傷し、そのうち50名は不治の身体傷害者となった。

訴状はまた、商店やオフィスのみならず、船舶や飛行機への爆撃を含む、止むことのない破壊やテロ・キャンペーンを記述している。最も大きい破壊の例はもちろん、1976年、バルバドス沖での「クバーナ」航空機への爆撃で、この時は搭乗者73人が全員死亡した。キューバの外交官や公務員の殺害も世界中で起こっている——1980年のニューヨーク市路上での暗殺など。このキャンペーンは、キューバの警官、兵士、水兵らの殺害、1997年の外国人一人を殺した、ホテル連続爆破の行われた1990年代まで続いた。この爆破キャンペーンの狙いは、観光客を減らすことにあり、最後には、キューバの情報局員がアメリカにわたり、爆破をやめてくれるよう交渉しなければならなかった。

そうしたことに付け加えて、訴状が提出されてから16年間、アメリカとその要員が行った、多くの財政的なゆすり、暴力、破壊行為をあげることができる。その全体を考えれば、キューバ人民に加えられた深く根付いた傷とトラウマは、この島国特有の9・11とみなすことができる。